

# スピノザ形而上学理解のための方法論

松田克進

(受付 2004年10月12日)

## 序

### 本論の意図

歴史上の所謂「大哲学者」の思想は、現代において哲学する人間にとって、具体的な思索の材を提供する極めて貴重なデータベースを構成するものであろう。ホワイトヘッドによって「天才の世紀」と銘打たれた17世紀ヨーロッパの哲学者たちの思想も、まさにそのようなデータベースの極めて重要な部分を担うものであると思われる。にも係わらず、最も重要な17世紀形而上学者の一人ベネディクトゥス・デ・スピノザの思想の解釈作業は、現在もまだ依然として百家争鳴の状況の中にあると言わざるを得ない。これはいったい何故なのだろうか。

スピノザ解釈における重大な論争点のサンプルを挙げることは難しくない。例えば――

- |  |
|--|
| <p>①いわゆるスピノザの「汎神論」をどう解釈すべきか。それは世界（自然）全体を神と同一視するという単純な形而上学説なのか。それとも、フランスの碩学 M・ゲルーの言うように万有内在神論と見なすべきものなのか。それでもなければ、更に別の主張なのか。</p> <p>②心身問題に対するスピノザの回答は、D・デイヴィドソンが示唆するように今日の心身二側面説の先駆と見なしうるものなのか。それとも物質と精神との関係については何らかの二元論を採っていると解釈してもよいのか。あるいは、英語圏の代表的研究者 E・カーリーの言うように一種の唯物論と見なすべきものなのか。</p> <p>③スピノザを決定論者と称することは一般的であるが、彼の決定論のタイプはどのように解釈すべきなのか。すなわち彼は現実世界を唯一の可能世界と見なしているのか、それとも、昨今の解釈者が時に主張するように、現実世界内部における決定論のみを含意しているのか。</p> |
|--|

我々が本論で試みたいことは、解釈上のこれら急所について回答することではなく、(A)今もってこういった百家争鳴的な状況が継続している理由を、解釈者たちが従来採ってきたスピノザ解釈における〈一般的な方法論〉の内に見出すこと、そして(B)そのような〈一般的な方法論〉とは異なる方法論を提唱し、またその新たな方法論を具体的に適用する基本的なサンプルを提示すること、以上2点である。もう少し詳しく説明してみよう。

(A) スピノザ形而上学の主著『エチカ』は（少なくとも一見）所謂「公理体系」の様式で書かれている。すなわち、定義と公理が各部の最初に設定され、その後、それら定義と公理を用いて諸定理が論証される、という、ユークリッドが『原論』において用いたのを典型とする様式である。この書が（外見的には）公理体系として書かれているがために、従来の解釈者たちは、もちろん傾向の強度に個人差はあるとしても、スピノザの諸主張をその論証の筋道の順序で理解しようとする傾向があった。簡単に言えば、定理を定義・公理によって理解し、第2部を第1部によって、第3部を第1・2部によって理解するといった傾向である。しかし残念ながらスピノザの所謂「論証」の実際は決して公理的と呼ばれうるような秩序を持っていない。これには2つの理由がある。第1に、スピノザの論証は非常にしばしば非線形的である。第2に、スピノザの論証は時に構文論と意味論との混同に依拠している。したがって、『エチカ』を解釈するさい我々は、その公理的な外見に惑わされず、その非線形性や構文論／意味論の混同を考慮に入れた解釈方法を採らなければならない。

(B) そこで我々は、『エチカ』を読解するさいには、後続する定理や備考から先行する定義や公理や定理の〈意味内容〉を〈逆照射〉するという方法論を、必要に応じて用いなければならないと考える。ここで〈逆照射〉と言うのは、線形的な論理の順序に逆行する順序でテキストを眺める、ということの意味する。また〈意味内容〉というの、スピノザが用いる概念や命題が意味している事物や自然の構造のことである。スピノザが『エチカ』第1部および第2部で明らかにしたかったのは、決して諸概念の統語論的な関係ではなく、飽くまでも、自然界の根本的構造である。この根本的構造こそが彼の形而上学的諸定理の〈意味内容〉である。我々は意味論的関心をはっきりと前面に押し出して、彼のテキストを読むべきなのである。

以上の2点、(A)と(B)のそれぞれを、以下2つの章IとIIにおいて敷衍しよう。

## I 従来の方法論の問題性

### 『エチカ』の非線形性

スピノザの主著『エチカ』は、よく知られているようにユークリッド『原論』と同様の体裁で書かれている。いわゆる公理体系の様式である（スピノザはこれを「幾何学的秩序」と呼ぶ）。もし『エチカ』がその内実からして「公理体系」の名に相応しいものであるなら三百年以上もの間、解釈者をこれほどまでに悩ませ続けることはなかったであろう。しかしながら、『エチカ』の実際の叙述様式は公理体系の理念から大きくかけ離れたものであり、このことが主要な要因となって、その解釈は極めて困難な作業となって、スピノザ解釈は現在も依然として百家争鳴的な状況にある。

以上のような『エチカ』の問題性を2つの観点からより具体的に説明してみよう。

定義と公理といった基本前提を理解すれば、それ以後の諸定理が、積み上げ式に判然と理解できるような論理の性格を、今「線形性」と呼ぶことにすれば、『エチカ』はこの線形性

を全く充たしていない。これとは対称的に、同時代のパスカルはすでに、論理の線形性を公理体系の充たすべき条件として判然と強調していた、公理体系の充たすべき条件である。彼は著名な『幾何学的精神、および説得術について』という小品の中で、定義および公理が充たすべき諸規則を以下のように述べている。

#### 定義の規則

- (1) それ自体で明らかであるため、それを説明するための、より明晰な用語がないようなものは、何一つとして定義しようと企ててはいけない。
- (2) 少しでも曖昧ないし多義的な言葉は、何一つとして定義なしに取り入れてはいけない。
- (3) 用語の定義においては、完全に知られているかすでに説明されている語のみを用いること。

#### 公理の規則

- (1) 必要な諸原理は、どれほど明晰かつ明証的であろうとも、人々が承認してくれるかをあらかじめ問うことなしには、何一つとして取り入れないこと。
- (2) 諸公理においては、それ自体で完全に明証的な事柄のみを吟味すること。

#### 論証の規則

- (1) それらを証明するためのより明晰なものな何もないほどそれ自体で明証的な事柄を証明しようと企ててはいけない。
- (2) 少しでも曖昧な全ての命題を証明すること、また、それらの証明にあたっては、極めて明証的な公理、あるいは、すでに承認されたか論証された命題のみを用いること。
- (3) 諸定義が規定している用語の多義性によって欺かれることのないように、非定義項の代わりに定義項を常に心の中で置き換えること。(Pascal, 1658, pp. 596-7)

このような一連の条件を、『エチカ』がしばしば守っていないことを、すでに同時代のライプニッツは、「スピノザは時に誤謬推理をおかしており、その原因は彼が厳密な論証から逸脱していることにある」(1678年5月チルンハウス宛書簡)と述べて批判しているが、ライプニッツならずとも『エチカ』第1部の冒頭を読むだけでこのことは分かる。例は枚挙に暇が無いが、いくつかを挙げて見よう。

#### 非線形性の具体例

まず定義1では、「自己原因」が「その本質が存在を含むもの、あるいはその本性が存在する」としか考えられえないもの」として定義されているが、この「本質が存在を含む」ということが如何なる事態を意味するのかが明示されていない。そもそも「本質」という言葉の定義は『エチカ』の如何なる場所に於いてもなされておらず、第2部の定義2として「ものの本質に属す」という言葉の定義が置かれているだけである。次に、定義3では、「実体」が「それ自身のうちに在り、それ自身によって考えられるもの、言い換えれば、その概念を形

成するのに他のものの概念を必要としないもの」と定義されているが、「それ自身のうちに在る」や「それ自身によって考えられる」という言葉は定義されていない。

公理に目をやれば、極めて重要な公理4「結果の認識は原因の認識に依存しかつこれを含む」は、パスカルの言う規則(1)も規則(2)も全く充たしているとは思えない。公理5では「互いに共通点を持たないものはまた互いに他から認識されることができない」と述べられているが、この「共通点」の可能な範囲が不明である。任意の思惟の対象は少なくとも思惟の対象である>という共通点を持っていると思われるが、これが共通点の可能な範囲から排除されるのであれば、そのことが明示されねばならない。

論証に目を移せば、定理1「実体はその本性上その変状に先立つ」の「証明」は、わずか「定義3および5から明白である」となっているだけであるが、なぜ「明白」であるのかを見て取ることは難しい。そもそも「Aが本性上Bに先立つ」ということが何を意味するのかの説明されていない。また定理4「異なる2つあるいは多数のものは実体の属性の相違によってか、そうでなければその変状の相違によって互いに区別される」の「証明」では、「(定義3および5により)知性の外には、実体およびその変状のほか何ものも存在しない」と書かれているが、なぜここで属性が排除されているのかが不明である。これについてはライブニッツが「ここで私は、彼が属性を忘れているのに驚く (Hic miror eum oblivisci attributorum)。……彼の論じ方が曖昧であるのか、あるいは、彼が知性の外に存する事物 (res) の中に属性を含めず、実体と様態のみを含めているのか、のどちらかである」(Ger, I, pp. 141-2)という覚書を残しているが、彼の当惑は今日の我々のものでもある。

### 「あと知恵」の必要性

以上のような若干の事例だけからでも明らかなように、『エチカ』を読む際に我々は、それが線形的な論理で書かれていることを決して期待してはならない。線形的な論理では、諸定理から遡って定義や公理の中身を規定してゆくというような「逆算」ないし「あと知恵」は不要かつ不正であるが、『エチカ』の場合、それを理解するためには、むしろ「逆算」ないし「あと知恵」は必須であると言ってよい。このことはもちろん従来の解釈者も意識の深淺の差こそあれ了解していたことであり、彼らによって「あと知恵」の活用もしばしばなされてきたが、我々は、あらためてここで、その必須性を強調しておきたい。なぜならば従来の解釈者は余りにも『エチカ』の公理体系という外見に引きずられ、スピノザの諸主張の論証順序にこだわりすぎていたと思われるからである。例えばゲルーの大著はその典型であろう。彼は『エチカ』を、あたかも完全に線形的な論理の見本であるかの如く扱っており、この方法が彼の解釈に少なからぬ恣意的要素(例えばスピノザの内に万有内在神論と認めるといった点)をもたらしているように思われるのである。

『エチカ』は線形性を備えた論理的構築物では全くない。言わば『エチカ』はそれ自体が一個の非線形的な、ホーリスティックなシステムを成しているのである。アナロジーを使うことが許されるならば、この書物は生命体に喩えることができよう。生命体の組織の機能は、臓器におけるその位置づけを見なければ判然とは分からぬだろうし、更に、臓器の機能も生命体全体におけるその位置づけによって初めて十全に規定されよう。同様に、『エチカ』で展開されている形而上学的な諸命題（定義・公理・定理）の内実は、この『エチカ』という書物全体においてスピノザが最終的にどのような形而上学体系を意識していたかという観点から読解しなければ理解が困難なのである。

### 構文論的／意味論的混乱

以上のように、『エチカ』の「公理体系」は同時代人パスカルの設定した基準をまず全く充たしていないが、問題はそれだけではない。意味論と構文論との区別が顧慮されていない、という問題も、更に追い討ちをかけるのである。もちろん、公理体系の論理において意味論と構文論という二つの側面を明確に区別することを17世紀の哲学者に要求することはある種のアナクロニズムであり、このような区別はパスカルやライプニッツのような数学者においてもまだ萌芽的な段階にあったと言わねばなるまい。一般的な見方に従えば、この区別が完全に明瞭なテーゼとして打ち出されるのは、1899年のヒルベルトによる『幾何学の基礎』によってである。そこでヒルベルトは、幾何学の公理体系における「点」「直線」「平面」といった諸概念が、実は定義される必要のない無定義概念であり、それらの概念の意味内容（指示対象）が如何なるものであるかは幾何学の公理体系の具体的構成（すなわち構文論としての幾何学）に対して何ら関与しないことを宣言した。そしてこのことを端的に、「点、直線、平面と呼ぶかわりに、机、椅子、コップと呼んでも構わない」という有名なスローガンで表現したのであった。

要するに、公理体系を展開するにあたっては、その基本用語の意味内容（指示対象）を規定する必要は実はなく、公理体系の展開とは、無定義用語としての基本用語（基本記号）同士の合法的な組み合わせ方を紡ぎだしてゆく記号操作に他ならないのである。そして基本用語の意味内容（指示対象）の考察は、このような記号操作とは別個の次元に属する事柄であるとされるのである。

### パスカルの先見性

先ほど我々は、以上のような構文論と意味論との明確な区別を17世紀の哲学者に求めるのはアナクロニズムであると言った。ただし、パスカルとスピノザを比べた場合、この区別に関する意識の違いは歴然としている。パスカルは上に引用した「定義の規則」の規則(1)において、公理体系の基本用語が無定義語として扱われねばならぬことを含意しているし、ま

た同書の別の箇所では次のように述べているのである。

「幾何学は、空間、時間、運動、数、同等というような事物のいずれをも、また多く存在する同様なものをも、定義しない。なぜならば、それらの用語は言語の分かる人々に、それらが意味している事物をきわめて自然に示すので、それらを解明しようとするれば、教示するよりもむしろ曖昧にすることになるからである。……

そこで、世には定義され得ない語があるということが充分に分かる。そして、自然が全ての人間に与えた類似の観念によってこの欠陥を補ってくれなかったならば、我々の全ての表現は混乱していたであろう。……

といっても、全ての人間が、定義するのが不可能であり無益であると私が言った事物の本質について、必ずしも同じ観念を持っているわけではない。

一例を挙げれば、時間はこの種のものである。誰がそれを定義し得ようか。また全ての人間が、時間について語るとき、別にそれ以上の指示を与えなくても、その意味するところを思い抱くのに、それを定義する必要があるか。とはいえ、時間の本質については、多くの異なる見解がある。ある人々は言う、それは被造物の運動であると。他の人々は言う、運動の尺度である、等々。したがって、私が、全ての人間に知られているというのは、これらの事柄の本性的なことではない。それは単に、名前と事物との間の関係 (le rapport entre le nom et la chose) のことにすぎない。そこで、「時間」という表現に出会うと、皆は同じ対象に思いを向けるのである。それだけで、この用語は定義される必要がない。もっとも、後で、時間とは何かということを吟味する段になると、いったんそこに思いを向けた人が異なる意見を持つようになる。なぜなら、定義が作られるのは、命名される事物を指示するためであって、その本性を示すためではないからである。」(下線は引用者による) (Pascal, 1658, pp. 579–80)

ここでパスカルが言っていることを要約すると、こうなるであろう。基本概念とその指示対象としての事物との指示関係が確定していれば公理体系としては差し当たり充分であって、公理体系はそれらの事物の本性についてコミットするものではない、ということである。

パスカルの見解は非常に現代的である。彼は、最も基本的な概念は無定義語として導入されざるを得ないことに気づいている。公理によって与えられるのは、無定義語同士の構文論的關係である。あとは正しい推論規則(それは明示的に言及されていないが、定言三段論法や仮言三段論法など、古代から中世にかけての論理的な諸成果が前提されていると見てよからう)によって、新しい文章を構成してゆけば、正しい命題が得られるというわけである。パスカルは、公理体系にとって無定義語の指示対象の〈本性〉は未知であってかまわない、否それどころか、その〈本性〉については議論すべきではない、と言う。そのような議論を敢えて行うことが水掛け論を招来してしまうからである。公理体系を巡る水掛け論を避けるためには無定義語について定義を断念せねばならぬのである。

このように、パスカルにおいてすでに、公理体系内部の論証にとっては概念の指示対象(意味内容)はひとまず括弧に入れねばならぬという知見が披露されている。これに比べて、ス

ピノザは、そのような構文論と意味論との区別・峻別という意識は全く見当たらないと言ってよい。否、むしろ構文論と意味論との混同を彼は堂々に行っている場合すらある。

すなわち、スピノザにおいては、A という概念の指示対象が  $\alpha$  であり、 $\alpha$  の属性が F だとすると、スピノザは、A は F である、と帰結してしまうのである。これは論理的には成り立たない。例えば、「日本国総理大臣」という語の指示対象が事実左利きだからといって、左利き云々に関する言葉の規定が公理体系そのものに導入されていないのであれば、「日本国の総理大臣は左利きである」という定理が構文論的に演繹されるはずがない。ところがスピノザはそのような演繹を行ってしまうのである。この典型的ケースをチルンハウスとの往復書簡の内に見てみよう。

#### チルンハウスとの遣り取りにおける定義論

チルンハウスは「書簡82」で次のようにスピノザに問う。

「これは数学において私の常に気づいていることですが、我々はそれ自体で観られた各々のものから、換言すれば各々のものの定義から、少なくとも一つの特質 (proprietas) は演繹することができます。しかし多数の特質を得ようとするれば、定義されたものを他のものに関係させることが必要です。そうすれば、それらのものの定義の結合 (conjunctio definitionum) から、新しい特質が帰結します。例えば、私が円周だけを考察するとしたら、私はそれから、円周が全ての箇所て相似のあるいは同形的であり、この特質によってそれは他の曲線と本質的に異なる、ということだけしか演繹できないでしょう。それ以外の特質はそれから演繹し得ないのです。しかし、これを他のものに関係させるなら、すなわち中心から引かれた半径なり、円内で相互に交差する2つまたは多数の直線なりに関係させるなら、それからもっと多くの特質を演繹し得るでしょう。このことは貴下の御論考『エチカ』第1部の中でおそらく最も重要な定理である定理16と或る意味で矛盾するように思われます。あの定理は、与えられた各々のものの定義から多数の特質が演繹され得ることをあたかも既知のこととして仮定しているのですから。しかしそうしたことは、定義されたものを他のものに関係させなければ不可能だと私には思われます」(G, IV, pp. 333-4)

ここでチルンハウスが言っていることを記号を用いて表現すれば、大凡次のようになるであろう。今仮に、F という述語を次のように定義したとしよう。

$$F(x) = \text{df. } G(x) \ \& \ H(x). \dots\dots\dots(*)$$

チルンハウスは、この定義だけに着目する場合、x が F であることから帰結できるのは、まさにこの定義式の中身だけ、すなわち x は G かつ H であるという一事だけではないか、と考える。そしてこの一事以外のことを帰結するためには、G や H を他の特性と関係付ける諸命題にも着目せねばならない。例えば、今、

$G(x) = \text{df. } I(x) \ \& \ J(x).$

$H(x) = \text{df. } K(x) \ \& \ L(x).$

という2定義が別個に存在するとしよう。これらの定義式を定義式(\*)と組み合わせることによって、初めて、 $x$ がFであることから、 $x$ がGかつHであるという一事に加えて、更に $x$ はIかつJかつKかつLであるという事柄も帰結するのである。

ところがスピノザは、第1部定理16で、次のように述べている。

「およそ物の定義が与えられると、そこから知性は多数の特質を——実際にその定義（言い換えれば物の本質そのもの）から必然的に生じる諸々の特質を——結論する、そして物の定義がより多くの実在性を表現するにつれて、言い換えれば定義された物の本質がより多くの実在性を含むにつれて、それだけ多くの特質を結論する」。

これがチルンハウスには納得できない。彼には「与えられたおのおのの物の定義から多数の特質が導出され得ること……は定義されたものを他のものに関係させなければ不可能だと思われる」のである。

これに対してスピノザはどう答えたか。

「我々はそれ自体で観られたおのおのの物の定義から一つの特質しか導出できないということは、おそらく最も単純な事物の場合、あるいは理性の有（私は図形をもこの中に数えいれます）の場合には当てはまるでしょうが、実在的事物の場合は当てはまりません。というのは、私は、神をその本質に存在が属する実有として定義することだけによって、それから神の遠くの特質——例えば神は必然的に存在するとか、唯一、不可変、無限等々であるとかいうような——を結論しています。このようにして私はなお他の多くの例を挙げることができるのですが、それは今は割愛しましょう」（書簡83；G, IV, p. 335）。

チルンハウスとスピノザとの齟齬のポイントは明らかだと思われる。チルンハウスにとって論証とは、諸命題を組み合わせる構文論的なレベルで行われるべきものであり（彼は「定義の結合」という表現を用いている）、論証過程に概念の指示対象の諸性質を滑り込ませてはいけない。これに対してスピノザは、図形等の理性の有（抽象的存在者）についてはこの見解を認めるものの、実在的事物を指示する概念の場合には、そのような制限は要らない、と考えるのである。そこで、「神」という概念の指示対象（すなわち存在がその本質に属するという実有）を見てみれば、そこには無限に多くの事物を産出するという性質が存するのだから、「神」の定義から「そこから無限に多くの事物が産出される」という述語を帰結しても構わないと言うのである。



## フリースとの遣り取りにおける定議論

スピノザが「公理体系」に関してこのようなく混乱を抱えていることは、友人シモン・ド・フリースとの、より初期に属する往復書簡（書簡8と書簡9）においても垣間見ることができる。そこでフリースはスピノザに定義の本性を尋ね、議論の題材として数学者ボレッリの見解と数学者クラヴィウスの見解を並べる。フリースが要約するところでは、ボレッリにとっての定義とは「第一の、最も明白な、真の本質的性格ないし構造（structura）から成らねばならない」ものであり、他方クラヴィウスにとっては、定義が「第一の、あるいは最も明白な、あるいは真の性格であるかどうかは大事な要件ではなく、ただ与えられた定義が或るものと実際に一致（convenire）することを主張しさえしなければよい」とされる。ここでボレッリが言っているのはいわゆる実在的定義（対象の本質を規定する定義）であり、当時としては常識的な定義観の一部であるが、他方クラヴィウスの見解は非常に＜現代的＞な印象を与える。彼によると、我々が定義と事物との一致を主張しない限り定義はその指示対象の本質規定をする必要はないのであり、この見解は、明らかに、＜定義と事物との一致が保証されなくとも公理体系は可能である＞という見解を含んでいると思われる。これはまさに、我々が先に見たパスカルの『幾何学的精神、および説得術について』における見地と基本的に同じものに思われる。公理体系においては構文論的なプロセスが重要なのであって、事物との一致関係は問題とはならないのである。

では、フリースの質問に対してスピノザがどう反応したか。彼は定義の種類を区別することを推奨し、次のように述べる。

「もっぱらその本質が求められている物、その本質について不確かな点のある物、そうした物を説明するために役立つ定義と、それ自身が吟味されるためにのみ立てられる定義とを区別〔しなければならない〕。前者は、一定の対象を定義するのだから真なものでなければならないが、後者はその必要がない。例えば誰かがソロモンの殿堂（tempolus Solomonis）の描像（descriptio）を私に尋ねた場合、私は彼と単なる空談を交わそうとするのでない限り、彼に殿堂の真の描像を伝えねばならない。しかし、私が自分の建てようとする或る殿堂を頭の中で設計して、その描像から、私はこれこれの敷地、これこれの数だけの石、その他の建築材料を買わねばならないと結論するとする。この際、健全な精神の持ち主なら、私が誤った定義を用いたから私の結論は誤りだなど言うだろうか」（G, IV, pp. 42-3）。

ここでスピノザ述べているのは「実在的定義」と「名目的定義」の区別についてであるとされる。実在的定義は「知性の外にある通りのものであり、これは真なものでなければならない」が、他方、名目的定義は「充分理解されるものであればよいのであって、……真理に関しなくても良い」。これは当時としてはきわめて普通の定義区別であり、スピノザの蔵書にもあった『ポール・ロワイヤル論理学』にも書かれている事柄である。他方、せつかく

フリースがクラヴィウスの定義観を引き合いに出しているにも係わらず、スピノザはそれについては一顧だに与えない。つまり彼には、パスカル的あるいはクラヴィウスの定義観が全くないのである。もちろんそれは当時としては決して<遅れた>態度ではない。この点で彼を非難することはアナクロニスティックであろう。しかしいずれにせよ、今日スピノザを解釈しようとする我々は、彼が論証過程においてかなり自由自在に概念の指示対象の諸性質を意識し、それを結論の中に取り込んでいるという事情については充分注意しなければならないのである。

### 幾何学者のアナロジー

このことについて一つのアナロジーを紹介しよう。今眼前に一人の幾何学者がいて、彼が自分の「公理体系」を我々に提示していると仮定しよう。我々は彼の「公理体系」の諸定理の中に、<三角形の内角の和は180度より小さい、それどころか、三角形が大きくなるほど0度に近づく>という定理を発見して驚く。そしてその定理が彼の「公理体系」においてどのように証明されているかを構文論的に綿密にチェックする。しかし、我々が見るところ、彼の「公理体系」の定義や公理からは、到底、そのような定理は論証されえないように思われる。そこで我々は、彼の「公理体系」には何か隠れた定義や公理が潜んでいるのではないかと考え、様々な仮説を立ててみる。そのような仮説は何通りも立てることができるため、この幾何学者に対する解釈作業はそのうち百家争鳴的な状況を呈するようになってゆくであろう。——しかし次のような発想の転換は不可能だろうか。眼前の幾何学者が実は、構文論と意味論とを混同するような方法によって諸定理を導いていたと考えるのである。すなわち、公理体系の外見の背後で、実は、概念の指示対象を眺め、その対象に妥当する諸性質を諸定理の中に滑り込ませていたと考えるのである。もしこのような解釈が説得的に構成できるのならば、例の百家争鳴的な状況は解消する可能性がある。この幾何学者の場合、実は、「直線」という概念で「特定の円Cに直交する円の、Cの内部に含まれる部分」を指していたことが判明したと仮定してみよう。そうすると、彼にとっての「三角形」とは、三つの（内部に凸な）円弧によって囲まれている平面図形を意味しているはずであり、構文論と意味論とが混同される限り、<三角形の内角の和は180度より小さい、それどころか、三角形が大きくなるほど0度に近づく>という定理が「証明」されることも十分に理解可能である。この幾何学者はロバチェフスキー幾何学の世界を眺めていたのである。

我々が言いたいことは、まさに、スピノザを解釈するさいもこのアナロジーに登場する幾何学者に対するような態度が必要ではないか、ということに他ならない。「神」「実体」「属性」「様態」といった諸概念によってスピノザがいったい何を具体的に眺めていたのか、ということ、適宜、構文論的関心から離れて考えなければならないということである。

## II 新たな方法論とその実践サンプル

### 新たな読解方法

以上の議論から、『エチカ』を読解するための新しい方法が次の二つの特徴を備えねばならないことが明らかである。第1にそれは、『エチカ』の「公理体系」に線形性の論理を期待するものであってはならない。定義・公理からの積み上げとして定理を理解するという順序に一切固執する必要はないし、また固執してはならない。第1部から第2部を、第1・2部から第3部を理解する、といった順序を遵守する必要はないし、また遵守してはならない。むしろ、後続箇所から先行箇所を理解するといった逆照射の手順を積極的に導入するものでなければならない。

第2にそれは、現代的な公理体系の理念が要求するような構文論的な潔癖さを尊重するものであってはならない。スピノザが『エチカ』で行っている「論証」は決して公理と推論規則とから成る記号構成のゲームではないのである。彼は諸概念の指示対象を明らかに意識している。その指示対象の諸特性を意識している。そして、場合によってはかなり自由に、その諸特性を自らの「論証」に滑り込ませている可能性があるのである。したがって我々は、彼の「論証」を理解するにあたり、彼の用いる重要概念の指示対象として、何らかのモデルを設定してゆくべきである。先ほど見たフリースとの往復書簡で、スピノザは、定義の指示対象の例として「ソロモンの殿堂 (templum Solomonis)」を挙げていた。このことに引っ掛けて表現するならば、我々はスピノザ形而上学を理解するにあたり、彼が「神」「実体」「様態」「属性」といった表現を用いるさい意識していた形而上学的な「ソロモンの殿堂」の構造を積極的に検討しなければならないのである。スピノザ形而上学という「ソロモンの殿堂」の構造について、その1次近似となるモデルをまず設定し、それを土台として、更に2次近似、3次近似となるより精密なモデルへと修正してゆかねばならないのである。そのような作業を通じて初めて、スピノザという大規模な形而上学者が抱いていた根本的世界像が見てくることであろう。

さて、それでは我々は、スピノザの『エチカ』読解のために、この著作の先頭（すなわち第1部の定義および公理）から読むのではないとすれば、どの箇所から読めばよいのであろうか。言い換えれば、スピノザの形而上学の「ソロモンの殿堂」が最も如実に物語られている箇所——あるいはそのような根本的構造を判読するために最も効果的な入り口——は、『エチカ』のどこに位置しているのであろうか。

我々は、それは第2部定理7であると考え。そしてこの選択に対してスピノザ研究者からあまり強い異論はないのではないかと予想する。周知の通り第2部定理7はいわゆる物心

平行論（心身平行論）が述べられている命題であり、スピノザ形而上学の特殊性（とりわけデカルト的二元論との対比におけるそれ）を象徴するテーゼと目されているものである。しかし我々が見るところでは、この定理（およびその証明、系、備考）は、単にスピノザ形而上学の主要な一特性を表現しているのみではなく、スピノザ形而上学の根本的構造を如実に物語っているのであり、それゆえに、先行箇所である『エチカ』第1部の内容、更には「神」「実体」「様態」「属性」というスピノザの根本的概念の意味内容を＜逆算＞するために重要なテキストであると考ええる。

対象となる定理・証明・系・備考のテキストの分量はかなり短いものである。以下に我々は、それらすべてを再現し、それらの読解方法の具体的サンプルを提示したいと思う。そしてこのサンプルこそが、スピノザ形而上学に接近するための最も効果的な方法の実例となると考えるものである。

#### テキストの提示

以下に、第2部定理7およびその証明・系・備考を再現する。ただし後の議論の便宜を考慮して、①②等および(a)(b)によってテキスト全体を小テキストに区分けすることにする（したがってこれらの数字および記号は原典には存在しない）。また適宜ラテン語原文も挿入することにする。

##### 定理7

①観念の秩序および連結はものの秩序および連結と同じである（Ordo, & connexio idearum idem est, ac ordo, & connexio rerum）。

##### 証明

②第1部公理4から明白である。

③なぜなら、因果的に惹き起こされた各々のものの観念（cujuscunque causati idea）は、そうした結果を生じた原因の認識（cognitio causae, cujus est effectus）に依存するからである。

##### 系

④この帰結として、神の思惟する能力（Dei cogitandi potentia）は神の行動する現実的能力（ipsius actuali agendi potentia）に等しいことになる。

⑤言い換えれば、神の無限な本性（infinita Dei natura）から形相的（formaliter）に起こる全てのことは、神の観念（Dei idea）から同一秩序・同一連結（idem ordo, eademque connexio）をもって神のうちに表現的（objective）に起こるのである。

##### 備考

⑥先へ進む前に、ここで、我々が以前に示したことを記憶に呼び戻さなくてはならない；

⑦(a)それはすなわち、無限な知性（infinitus intellectus）によって実体の本質（substantiae essentia）を構成していると知覚され得る全てのものは単に唯一の実体（unica tantum substantia）に属しているということ、(b)したがってまた思惟する実体（substantia cogitans）と延長

した実体 (substantia extensa) とは同一の実体 (una, eademque substantia) であって、それが時にはこの属性のもとにまた時にはかの属性のもとに (jam sub hoc, jam sub illo attributo) 解されるのであるということ、これである。

- ⑧同様に (sic etiam), 延長の様態 (modus extensionis) とその様態の観念 (idea illius modi) とは同一物 (una, eademque res) であって、ただそれが二つの仕方では表現されている (duobus modis expressa) までである；
- ⑨このことは、二、三のヘブライ人たち (quidam Hebraeorum) もおぼろげにはあるが気付いていたように思われる、なぜなら彼らは神 (Deus) と神の知性 (Dei intellectus) と神によって認識された事物 (res ab ipso intellectae) とが同一 (unum, & idem) であることを主張しているのだから。
- ⑩例えば、自然の中に存在する円 (circulus in natura existens) と、同様に神の中にあるこの存在する円の観念 (idea circulis existentis) とは同一物 (una, eademque res) であり、それが異なった属性 (diversa attributa) によって説明されるのである；
- ⑪ゆえに我々が自然 (natura) を延長の属性のもとで (sub attributo Extensionis) 考えようと、あるいは思惟の属性のもとで (sub attributo Cogitationis) 考えようと、あるいは他の何らかの属性のもとで (sub alio quocunque) 考えようと、我々は同一の秩序 (unus, idemque ordo) を、すなわち諸原因の同一の連結 (una, eademque causarum connexio) を、言い換えれば同一諸事物が相互的に継起すること (easdem res invicem sequi) を、見出すであろう。
- ⑫私が、神はただ思惟するもの (res cogitans) である限りにおいてのみ、例えば円の観念の原因であり、また延長したもの (res extensa) である限りにおいてのみ円の原因である、と言ったのも、その理由とするとところは次のようなものに他ならない、すなわち、円の観念の形相的有 (esse formale ideae circuli) はその最近原因 (causa proxima) としての思惟の他の様態によってのみ知覚され、思惟のこの様態はさらに他のそれによって知覚され、このようにして無限に進み、こうして、ものが思惟の様態 (cogitandi modi) として見られる間は全自然の秩序 (ordo totius naturae) あるいは原因の連結 (causarum connexio) は思惟の属性 (Cogitationis attributum) によってのみ説明されなければならないし、ものが延長の様態 (modi Extensionis) としてのみ見られる限りは全自然の秩序 (ordo totius naturae) もまた延長の属性 (Extensionis attributum) のみによって説明されなければならない、という理由からに他ならない、そして同じことが他の属性 (alia attributa) についてもあてはまると私は考えるのである。
- ⑬ゆえに、神が無限に多くの属性 (infinita attributa) から成っている限りにおいては、神は真に、それ自体においてあるがままの事物 (res, un in se sunt) の原因である；
- ⑭私はこのことを現在のところこれ以上に明晰に説明することができない。

### 様態の「分類」原理としての属性

まず最初に、「属性」という概念の用いられ方について最低限のことを明らかにしたい。引用箇所全体から明らかなのは、属性は「延長」「思惟」以外にもあるということである。テキスト⑪では、「他のいかなる属性のもとで考えようと」という譲歩節が登場し、テキスト⑫には「他の属性」(複数) という表現が登場している。また、テキスト⑬においては、「思

惟の様態」「延長の様態」「他の属性の様態」という表現が使われており、ここからして、各々の様態は、少なくとも何らかの一つの属性に属する、と考えられていることが分かる。すなわち属性とは諸様態の分類原理となっているのである。これは言い換えれば、属性は諸様態からなる集合であるということである。

それでは、異なる二つの属性 A と B に同時に属する様態は存在するのだろうか。テキスト⑧によるとそのような様態が存在するように一見思われる。なぜならそこでは、「延長の様態とその様態の観念〔これは明らかに思惟の様態である〕とは同一物であって、ただそれが二つの仕方で表現されているまでである」と書かれており、今、ある延長様態  $x$  の観念たる思惟様態を  $I(x)$  と表現するならば、 $x$  と  $I(x)$  との数的同一性がここで主張されているように一見思われるからである。スピノザが果たして  $x$  と  $I(x)$  の貫属性的な数的同一性の可能性を認めているか否かは慎重な検討を要する問題である。この問題については後に改めて検討することにするが、今の時点では、代数的観点からの問題点にだけ言及しておきたい。代数の基本的定理の一つとして、集合の諸要素は、その集合内において定義された同値関係によって類別される、ということがある。類別とは諸要素が、互いに共通部分を持たない諸集合のうちのどれかに分類されることであり、同値関係とは、反射律・対称律・推移律という三条件（同値律）を充たす二項関係のことである。スピノザが様態間の〈同属性〉という二項関係をどう捉えていたか、を『エチカ』全体から総合的に確認してみみると、彼がこの関係を同値関係として捉えていたことは明らかである。詳しく言えば、スピノザにとっては明らかに、次の三つの条件が成り立つ。

- (i) 任意の様態  $a$  について、 $a$  と  $a$  は同じ属性に属する。(反射律)
- (ii) 任意の様態  $a, b$  について、 $a$  と  $b$  とが同じ属性に属するならば、 $b$  と  $a$  も同じ属性に属する。(対称律)
- (iii) 任意の様態  $a, b, c$  について、 $a$  と  $b$  が同じ属性に属し、かつ  $b$  と  $c$  が同じ属性に属するならば、 $a$  と  $c$  も同じ属性に属する。(推移律)

そうすると、代数の基本定理に従う限り、我々は、属性が単なる「分類」原理にとどまるものではなく、「類別」原理の機能をも担っていたと見なければならぬのではないかと思われる。別言すれば、異なる属性間に共通部分が存在することを認めることはできないと思われる。とするならば、テキスト⑧中の件の箇所を、 $x$  と  $I(x)$  との数的同一性を意味するものとして安易に捉えることはできないことになる。ここには慎重に検討すべき問題が存在するのである。

### 属性内の因果的結合

テキスト⑪からは、スピノザがそれぞれの属性の内部において「連結 (connexio)」とい

うものが存在すると考えていることが分かる。またこの「連結」とは当然テキスト①における「秩序および連結 (ordo, et connexio)」と同じものであると予想される。では、この「連結」ないし「秩序」とは具体的には如何なるものであろうか。テキスト①で「諸原因の連結 (causarum connexio)」と言われ、テキスト②でも「全自然の秩序あるいは原因の連結」と表現されていることからすると、スピノザが考えているのは「因果的連結」のことであろうと予想され、またこのことはテキスト②と③からも明らかであると考えられる。しかし問題なのは、延長属性に属する諸様態つまり物体に関しては、それら相互の因果結合というのは理解しやすいが、他方、思惟属性に属する諸様態つまり観念に関しては、それら相互の因果関係というのは捉えにくいのではないかと、ということである。要するに、観念と観念との間に因果関係が成立すると言えるのか、という問題である。この問題については、＜スピノザは観念相互の間にも因果関係が成立し得ると考えている＞と答えるしかない。それは「諸原因の連結」という表現が、テキスト①で属性を特化することなし用いられていることから、またテキスト②ではとりわけ「思惟の様態」について用いられていることから明らかである。

それではさらに一歩進めて、各属性内における因果的連結とはどのようなものなのだろうか。とりわけ延長属性内における因果的結合とは如何なるものか。これについては、以下の我々の議論を円滑化するために簡単な雛形を一次近似としてここで設定したい。この雛形を構成するにあたっていかなる条件を考慮するかという匙加減は難しい問題である。あまり多くの条件を盛り込みすぎると、スピノザの形而上学立場を恣意的に狭めることになるし、また条件が弱すぎると、雛型がスピノザの＜意味論的な推論＞を理解する上で実際のな道具として機能しない可能性があるからである。我々は差し当たり二つの条件を重視したい。まず第2部定理13の後に展開された「自然学的付論」の「要請3」と「要請5」に着目する。

「要請3 人間身体を組織する個体、したがってまた人間身体自身は、外部の物体から極めて多様の仕方で刺激される」

「要請6 人間身体は外部の物体を極めて多くの仕方で動かし、かつこれに極めて多くの仕方で影響することができる」

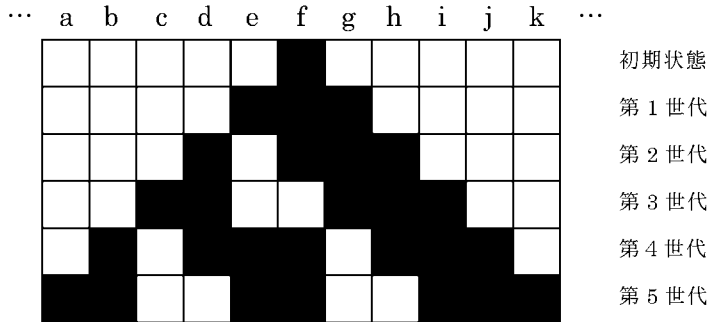
ここから分かるのは、内部の物体（この場合は人間身体）が外部の物体（環境）に因果的影響を与えることも、外部の物体が内部の物体に影響を与えることもあり得る、ということである。つまり因果関係は双方向に働きうるのである。これを＜双方向性条件＞と呼ぶことにしよう。また言うまでもなく、スピノザにとっての因果関係とは必然的なものであり、そこに偶然の入る余地はない。「与えられた一定の原因から必然的にある結果が生じる」（第1部公理4）のである。この条件を＜必然性条件＞と呼ぶことにしよう。さてそれでは、＜双方向性条件＞と＜必然性条件＞を充たす非常に単純な因果結合の雛型としてはどのようなも

のが考えられるだろうか。我々はイギリス人科学者スティーヴン・ウルフラムが着想した1次元セル・オートマトンを取り上げてみたい<sup>1)</sup>。

セル(枠目)が横一列につながったリボンを考え、各セルは黒か白かの状態にあるとする。黒と白は、差し当たりそれぞれ<運動>と<静止>と考えておくことにしよう。このリボンの下に同形のリボンを配置していく。この操作は離散時系列で行われるので、最初のリボンを初期状態、次のリボンを第1世代、次を第2世代、以下第3世代、第4世代などと呼ぶことにする。ここで、一つの世代から次の世代への変化を局所的に定める規則を導入する。すなわち、あるセルの状態はそれ自身および左右のセル、合わせて三つのセル(これをそのセルの「近傍」と呼ぼう)の状態で決定されるとする。近傍の黒・白の配列は全部で8種類あるので、規則の定め方は2の8乗、すなわち256通り考えられ得る。今仮に規則を次のように決める(上段3個のセルが真ん中のセルの近傍の条件を、下のセルが結果の状態を表す)。



そうすると、例えば次のような1次元セル・オートマトンの絵模様ができ上がる。



なお、a, b, c, …, k は個々の延長様態(物体)を示しているが、第1部定理16において延長様態は無限に多く存在すると考えられているので、横一列のリボンは左右に無限の長さを持つと考えなければならない。つまり a の左へも、また k の右へも、セルは無限に広がっている。ではそれらのセルは黒か白かを決めねばならないが、今は便宜的に全て白であると仮定しておこう。

このセルオートマトンが<双方向条件>と<必然性条件>を充たしていることは明らかである。例えば第1世代における物体 f の状態は、初期状態における f の状態だけによって決

1) 以下に掲げる1次元セル・オートマトンの説明および図は、吉永(1996)内のものに依拠している。



まるのではなく、初期状態における e と g (つまり f の環境に存する 2 つの物体) の状態によって影響される。しかし他方、初期状態における f の状態は、第 1 世代における e や g の状態に対しても影響しているのである。これはまさしく〈双方的条件〉の充足と解釈されうる事態である。また、言うまでもなく、第 1 世代以下の任意の世代の任意のセルは直近の先行世代の諸状態によって厳密に一意的に決定されるのであり、初期状態以前のセルの状態も、ここでは便宜的に省略せざるを得ない直近の先行世代によって厳密に決定されていると仮定できるのであり、かくして〈必然性条件〉も充足されていると見なすことができる。

もっとも、言うまでもなく、これは物体世界の因果関係についてのスピノザの描像としてはあまりにもプリミティブなものである。なぜならば、第一に、スピノザは時間が離散的なものだとは決して認めないので、ここで離散時系列を用いているのはまったく暫定的・便宜的な措置と見なければならぬ。第二に、各物体の取り得る状態としては〈運動〉と〈静止〉の 2 種類しか考えていないのも、現実から隔たっている。運動状態としては無限に多様なものが考えられ得よう。第三に、物体の並び方が 1 次元であることも問題である (実際には 3 次元である)。第四に、物体の相対的移動の可能性が反映されていない (例えば b は常に a と c の間に位置するようになっていく)。第五に、単純物体と複合物体との区別が表現されていない。——その他、このような不十分な点は言い出せば切りがない。しかしながら、繰り返しになるが、スピノザの形而上学にアプローチするためには是非とも意味論的に迫ることが肝要なのであり、そのためには、暫定的にであれ何らかのモデルを用意したほうがよいし、また、彼の形而上学の基本線をまずしっかりと理解するためには、煩瑣なモデルよりも、ある程度単純なモデルの方がクリアな見通しを立てるのには効果的であろう。事実、以下の論述において明らかになることを我々は期待しているのであるが、一次元セル・オートマトンのモデルは一次近似として十分にスピノザ読解に役立つのである。

### 思惟属性の場合

上に描いたセル・オートマトンは延長属性内における因果的結合の有様を示すものであった。それでは、思惟属性内における因果的結合はどのように表現できようか。スピノザが定理 7 で述べたいこと (の一部) は、それらの属性内における因果的結合が「同一 (idem)」であるということである。そこで我々は、観念相互の因果的連結のモデルとして、上図 (これを延長セル・オートマトンと呼ぼう) と同様のセル・オートマトン (思惟セル・オートマトンと呼ぶ<sup>2)</sup>) を構成したいのだが、少なくとも次の 3 つの点に注意しなければならないであろう。

第 1 に、延長セルオートマトンでは各セルの可能な状態としては運動と静止を取り上げ、

2) 注目すべきことに、『知性改善論』85 節においてスピノザ自身が精神を「一種の精神的オートマトン (automa spirituale)」と呼んでいる。

それぞれを■と□で表現したが、同じことを思惟セル・オートマトンに当てはめるわけにはいかない。そこで、黒を **b**、白を **w** という記号に置き換える。これら **b** と **w** は観念の可能な2種類の内容を表していることにする。

第2に、延長セル・オートマトンと思惟セル・オートマトンの初期状態の間に同型性は成り立つだろうか。スピノザは実はこの点については明示的な議論をしていない（というのもスピノザには初期条件という概念がなく、因果関係は「永遠から永遠に」続くと考えられているので当然である）が、第1部公理6「真の観念はその対象と一致しなければならない」に依拠しつつ、それらは同型的であると仮定することにしよう。そうすると、□□□□■□□□□□という初期条件に対応する思惟セル・オートマトンの初期条件は、**wwwwwbwwwww** となる。

第3の、そして最も重要な検討点は、近傍から何が結果するかを規定する因果規則（観念の状態と状態との因果規則なので「推論規則」と読んでも構わないであろう）がどのように規定されるのかということである。既述のように、3つのセルからなる近傍から1つの結果を導く規則は2の8乗、つまり256通り考えられる。思惟セル・オートマトンの因果規則（推論規則）としてこの256通りの中のどの一つが選ばれることになるのだろうか。まさにこの問題に答えようとするのが、第1部公理4「結果の認識は原因の認識に依存しかつこれを含む」なのである。つまり思惟セル・オートマトンの規則は、延長セル・オートマトンの規則と同型でなければならぬ、という公理なのである。一例を挙げれば、■□□から■を導く規則がある限り、**bww** から **w** を導く規則はあり得ない。**bww** を近傍とする場合の結果（帰結）は **b** でなければならないのである。かくして、次のような計8つの因果規則が決定されることになる。

**www bww wbw ww bbb wbb bbb**  
**w b b b b w w b**

そしてこれらの規則に従った思惟セル・オートマトンは次のような絵模様を描くことになる。

$\alpha$	$\beta$	$\gamma$	$\delta$	$\epsilon$	$\zeta$	$\eta$	$\theta$	$\iota$	$\kappa$	$\lambda$	
<b>w</b>	<b>w</b>	<b>w</b>	<b>w</b>	<b>w</b>	<b>b</b>	<b>w</b>	<b>w</b>	<b>w</b>	<b>w</b>	<b>w</b>	初期条件
<b>w</b>	<b>w</b>	<b>w</b>	<b>w</b>	<b>b</b>	<b>b</b>	<b>b</b>	<b>w</b>	<b>w</b>	<b>w</b>	<b>w</b>	第1世代
<b>w</b>	<b>w</b>	<b>w</b>	<b>b</b>	<b>w</b>	<b>b</b>	<b>b</b>	<b>w</b>	<b>w</b>	<b>w</b>	<b>w</b>	第2世代
<b>w</b>	<b>w</b>	<b>b</b>	<b>b</b>	<b>w</b>	<b>w</b>	<b>b</b>	<b>b</b>	<b>w</b>	<b>w</b>	<b>w</b>	第3世代
<b>w</b>	<b>b</b>	<b>w</b>	<b>b</b>	<b>b</b>	<b>w</b>	<b>b</b>	<b>b</b>	<b>w</b>	<b>w</b>	<b>w</b>	第4世代
<b>b</b>	<b>b</b>	<b>w</b>	<b>w</b>	<b>b</b>	<b>w</b>	<b>w</b>	<b>b</b>	<b>b</b>	<b>w</b>	<b>w</b>	第5世代

このように、公理4（と公理6）を認める限り、言い換えれば、因果規則の同型性（と初

期条件の同型性)を認める限り、必然的に、延長セル・オートマトンと思惟セル・オートマトンは同型的になる。これがまさしく、テキスト②およびテキスト③の意味するところであると思われるのである<sup>3)</sup>。

ただし我々はこれまで、初期条件相互の「同型性」、因果規則同士の「同型性」、セル・オートマトンの「同型性」という概念を直観的に用いてきた。これらの概念は明確に定義するまでもなく十分に明らかであると思われる(つまり簡単に言えばセルのタイプの縦・横の並び方が同じであるということである)が、ここで改めてセル・オートマトンの「同型性」という概念についてだけは正式に定義しておきたいと思う(なぜならばこれが後に見る「実体同士の数的同一性」の定義につながるからである)。

今、無限の行および無限の列からなる行列  $A(i, j)$  と、やはり無限の行および無限の列からなる行列  $B(k, l)$  があるとす。行列  $A$  の要素  $(i, j)$  から行列  $B$  の要素  $(k, l)$  への全単射写像  $\phi$  が、次の条件を充たすとき、 $\phi$  を「平行移動的写像」と呼ぶことにする。すなわち、 $\phi(i+m, j+n)$  は、行列  $B$  の要素のうち、行列  $\phi(i, j)$  より、行について  $m$ 、列について  $n$  移動した要素である、という条件である。

そうすると、1次元セル・オートマトン  $A$  と  $B$  との「同型性」は次のように定義される。

(a)  $A$  において或る数の状態  $F_1, F_2, F_3, \dots$  が、 $B$  において同数の状態  $G_1, G_2, G_3, \dots$  が存在する。ただし任意のセルは必ず何らかの状態をとるが、同時に2つ以上の状態をとることはできない。

(b)  $A$  から  $B$  に対して次のような条件を充たす平行移動的写像  $\phi$  が少なくとも一つ存在する。すなわち、 $A$  の任意のセル  $x$  と  $B$  のセル  $\phi(x)$  との間に、 $\langle x$  が状態  $F_i$  にある場合、かつその場合に限り、 $\phi(x)$  が  $G_j$  にある  $\rangle$  という条件である。

我々は、なぜセル・オートマトンを巡って以上のような議論をしてきたかといえば、それはもちろん、スピノザが属性内の様態の「秩序と連結 (ordo, et connexio)」と称するものの指示対象のモデルを手に入れるためであった。したがって、上に掲げた、セル・オートマトンの同型性の定義は、取りも直さず、属性  $A$  と  $B$  の秩序の同一性の定義としてもそのまま機能することになるのである。

3) この図の  $\alpha, \beta, \gamma, \dots$  は個々の観念を示すが、同一の観念が或る状態にあったり別の状態にあったりするということが何を意味するのか分かりづらいかもしれない。状態が変わるということは  $\langle$ 別の  $\rangle$  観念になるということではないか、という見方も在り得よう。ここでは、例えば  $p$  という同一の観念が、或る時は  $w$  という演算子を伴って「 $w(p)$ 」という形で、また別の時には  $b$  という演算子を伴って「 $b(p)$ 」という形で現れる、というように暫定的に考えていただきたい。

## 属性内の秩序としての実体

以上で我々は、「属性」とその内における「秩序」という概念について検討した。次に「実体」に進む。テキスト⑦では、第1部で論証されたことを確認するという形で、〈思惟する実体＝延長実体〉と述べられている。テキスト⑩は「ゆえに」という表現で始まっているが、この「ゆえに」は文脈的にはテキスト⑦を受けていると思われる。そしてテキスト⑪では、〈延長属性の因果的連結＝思惟属性の因果的連結〉ということが（主張の一部として）述べられている。テキスト⑦からテキスト⑪へのこのような流れからすると、スピノザが或る属性における実体と捉えていたものは、具体的には、その属性における因果的連結のことではないか、という推測が自然と浮かび上がる。我々は事実その通りであると考える。

テキスト④に注目したい。そこでは、テキスト①、すなわち〈思惟属性の因果的連結＝事物の因果的連結〉から、〈神の思惟する能力＝神の行動する現実的能力〉が即座に帰結するとされている。ここでスピノザが思惟属性の因果的連結と神の思惟する能力とを同一視していることは推測に難くない。神とは無限数の属性によって構成されている唯一の実体であり、思惟はそのような属性の一つである。とすると、神の思惟する能力とは、〈思惟属性において捉えられた、神という唯一実体の能力〉と換言されうるはずである。では、神の能力とは何か。これについては第1部定理34が「神の能力は神の本質そのものである」と主張している。つまり神の能力とは神という実体がつ偶有性ではなく神という実体の在り方そのものなのである。したがって、神の思惟する能力とは、〈思惟属性において捉えられた神という唯一実体そのもの〉である。さてそうすると、これと〈思惟属性の因果的連結〉とが同一視されていることになるのだから、スピノザがある属性における実体として捉えているものは、まさしくその属性における秩序（＝因果的連結）に他ならないということになる<sup>4)</sup>。

また神（唯一実体）と事物の因果的連結を重ね合わせて理解しようとする傾向は、『神学政治論』の各所においてもはっきりと窺うことができる。例えば『神学政治論』第3章（冒頭部分）では「神の指導ということを我々は、かの確固として不可変的な自然の秩序、すなわち諸々の自然物の連結と解する」（G, III, pp. 44–45）と述べられており、同書第6章では、「神の決定と命令、したがってまた神の摂理は実際には自然の秩序以外のなにものでもない」（G, III, p. 89）と述べられている。

それでは、実体の数的同一性はどのように定義されるのであろうか。すなわち、今、属性

4) スピノザ形而上学における「実体」をある種の秩序と捉える解釈は決して唐突なものではない。H・アリスンによると、スピノザにとっての神とは「普遍的法則の無限かつ必然的な体系」（Allison, 1987, p. 35）であり、「〔自然の〕無限かつ必然的な秩序」（ibid.）であり、「事物の必然的かつ普遍的な秩序」（op. cit., p. 49）であるとされる。また、A・ハートは次のように述べている。「注意すべきなのは、神即自然が混沌たる自然に秩序を課すのではなく、神即自然それ自体が自然の秩序であるということである」（Hart, 1983, p. 43）。

x における実体を  $\text{Sub}(X)$  と表記するとすれば、 $\text{Sub}(A) = \text{Sub}(B)$  はどのように定義され得るであろうか。今見たとおり、属性  $X$  における実体とは、 $X$  における秩序（因果的連結）に他ならないのであれば、 $\text{Sub}(A) = \text{Sub}(B)$  は、属性  $A$  と  $B$  それぞれの秩序（因果的結合）の同一性として定義され得ることになる。そしてこれはまた、 $A$ 、 $B$  それぞれの秩序のモデルとしてのセル・オートマトンの同型性によってすでに定義済みである。したがって、このセル・オートマトンの同型性が、そのまま、実体の数的同一性の条件として横滑りすることになるのである。

なお、スピノザ形而上学の根本テーゼとして唯一実体説（神のみが実体であるという説）が取り上げられ、その意味内容については諸解釈者によって様々な議論がなされてきたが、このテーゼは、我々のこれまでの成果に基づけば、次のように非常に単純にその内実を説明できることになる。すなわちスピノザは、無限に多くの属性が存在すると考える一方で、各々の属性内における因果連結を示すセル・オートマトンは全て同型的であると考えていたのである（このことは論証の対象であると言うより、自然の統一性に関する彼の公理であると思なすべきであろう）。したがって、今、属性を、 $A$ 、 $B$ 、 $C$ 、……と表記するならば、 $\text{Sub}(A) = \text{Sub}(B) = \text{Sub}(C) = \dots$  となる。つまり、これら諸属性における実体は全て数的に同一である。そしてこの同一実体をスピノザは「神」と名付けているのである。もちろん神ないし実体の存在証明については論じべきことはいろいろあるが、いざれにせよ、唯一実体説というテーゼの意味内容は、これ以上のことでも以下のことでもない。このことはテキスト⑦において（つまり延長属性と思惟属性との同型性を述べた直後に）スピノザが唯一実体説を「記憶に呼び戻さなくてはならない」と述べていることと呼応する。つまりスピノザにとって実体の唯一性とは属性の秩序の唯一性以上のことでも以下のことでもないのである。

### 様態の貫属性的同一性

さて、ここで我々は残した問題に取り組むことにしよう。すなわち、様態の貫属性的な数的同一性の問題である。ここでは特に延長様態  $x$  とそれに対応する思惟様態  $I(x)$  との間に、 $x = I(x)$  という数的同一性が成り立つのか否か、という観点から検討することにしたい。

今、延長セル・オートマトンと思惟セル・オートマトンとが平行移動写像  $\phi$  によって重ねあわせられるとしよう。列  $f$  と列  $\zeta$  が対応する。言い換えれば、延長様態（物体） $f$  と思惟様態（観念） $\zeta$  が対応しているわけである。このときスピノザは、テキスト⑧と⑩とを見る限り、 $f$  と  $\zeta$  が数的に同一な様態であると述べているかのように一見思われる。しかしこのような数的同一性を安易に認めてしまうと、すでに見たように代数的観点からして、延長属性と思惟属性が同一の属性であるという非スピノザ的な帰結をもたらすことになるし、またそのような数的同一性はスピノザのテキストからしても全く認めがたいものに思われる。

第1に、スピノザは『知性改善論』第33節で、「真の観念はその対象と異なるあるもの (diversum quid) である。なぜなら円と円の観念とは別のものであるから (Nam aliud est circulus, aliud idea circuli)」。というのは、円の観念は円のように円周と中心を有するあるものではないからである。同様にまた、身体の観念は身体そのものではない」と述べている。これは延長様態の性質と思惟様態の性質とは隔絶しているため、それらの様態の間には数的同一性は成り立たないという主張と見なされうる。第2に、いったん  $f$  と  $\zeta$  の数的同一性を認めてしまえば、延長様態  $f$  が何らかの思惟様態 (例えば  $\eta$ ) に対して、また思惟様態へが何らかの延長様態 (例えば  $g$ ) に因果的に作用することになってしまう。なぜならば、「 $f$  は  $g$  に因果的に作用する」および「 $\zeta$  は  $\eta$  に因果的に作用する」という正しい2命題中の「 $f$ 」と「 $\zeta$ 」が数的に同一の対象を意味する限り、一般的な外延の論理に依拠すれば<sup>5)</sup> それらを交換した2命題「 $\zeta$  は  $g$  に因果的に作用する」および「 $f$  は  $\eta$  に因果的に作用する」も正しい命題となってしまふからである。これは、属性を超える因果関係は成立しないというスピノザの主張と真っ向から反する事柄である。『エチカ』第3部定理2「身体が精神を思惟するように決定することはできないし、また精神が身体を運動ないし静止に……決定することもできない」と述べて、延長様態と思惟様態との因果的没交渉をはっきりと主張しているのである。また、同様の因果的没交渉の主張は、テキスト⑫においても述べられている。

以上のような諸理由を見ると、我々は、延長様態  $x$  とそれに対応する思惟様態  $I(x)$  の同一性は認められない、と結論したくなる。が、他方、テキスト⑧や⑩における「同一物」という表現の重みを無視することも難しく、またスピノザは第2部定理7備考以外においても、幾つかの場所で貫属性的な数的同一性を主張しているのである (例えば、第2部定理21備考では「身体の観念と身体とは、言い換えれば……精神と身体とは同一個体であって、それが或る時は思惟の属性のもとで或る時は延長の属性のもとで考えられる」と述べられ、第3部定理2備考では「精神と身体とは同一物であってそれが時には思惟の属性のもとで、時には延長の属性のもとで考えられるまでである」と述べられている)。

このように、スピノザのコーパスには、延長様態  $x$  とそれに対応する思惟様態  $I(x)$  との同一性を認めるテキストと否定するテキストとが混在している。我々はまさにこのような逆説的状况に、スピノザ形而上学における「様態」概念を理解するための秘密が隠されていると考える。この逆説的状况を整合的に解釈する作業が我々を「様態」概念の理解を導いてくれるであろう。

第1部定理25系でスピノザは述べる、「個物は神の属性の変状、あるいは神の属性を一定の仕方で表現する様態、に他ならない」。すなわち様態とは唯一実体たる神を局所的に表現

5) 一般的な外延の論理では、個体項  $t_1 =$  個体項  $t_2$  であるとき、 $A \supset A'$  ( $A'$  は、 $A$  に現れる個体項  $t_1$  を、量化関係に影響が出ない範囲で、任意の場所で  $t_2$  に置き換えて得られる式である) が導き出される。

するものである（＝様態は実体の局所的表現者である）。他方、A と B という二つの表現者の〈意味〉が同一であると同時に異なるという状況は、哲学史においては実は馴染み深いものである。すなわち近代意味論において、例えば「宵の明星」と「明の明星」は、指示対象においては同じであるが、意義においては異なる、ということは常識に属する。意義と指示対象との相違に類比的な相違が、スピノザ形而上学における様態の貫属性的同一性を解釈する上でも重要であるというのが我々の見解である。すなわち、延長様態（物体）a と思惟様態（観念） $\alpha$  とでは、指示対象は同一であるが、意義（＝指示対象の与えられ方）は異なるのである。

延長属性における実体とは、延長セル・オートマトンにおける□と■の並び方（絵模様）全体である。延長様態とは、そのような□と■の絵模様全体における特定の列における□と■の並び方（絵模様）を指示対象とするが、その並び方は□と■によって与えられなくても構わない。別段、w と b によって、あるいは陰と陽によって、あるいは1 と 0 によって与えられても構わない。これは、異なる属性において同一の実体が指示されうることと同様の事態である。そのような〈純粹〉な並び方が延長様態の指示対象である。ならば、延長属性における実体と思惟属性における実体とが同一の実体である以上、思惟属性においても、ある延長様態が指示するのと同じの並び方を指示する思惟様態が必然的に存在するはずである。まさしくこのような意味で、延長様態 a と思惟様態  $\alpha$  の指示対象は厳密に一致するのである。ところが他方、延長様態 a によって指示対象が与えられる様式と、思惟様態  $\alpha$  によって指示対象が与えられる様式とは、前者が□と■によるものであり、後者が w と b によるものであるかぎり、全く異なると言わざるを得ない。すなわち延長様態 a と思惟様態  $\alpha$  の意義は全く異なるのである。

そうすると、スピノザのコーパスにおいて、彼が様態の貫属性的同一性を主張しているのは、その指示対象が主題となっている文脈に於いてであり、彼がその貫属性的同一性を否定しているのは、その意義が主題となっている文脈に於いてではないか、という予想が自然に成り立つ。まさしくこれが我々の解釈である。

属性とは、様態がどのような仕方で実体を表現するのか、すなわち□や■で表現するのか、w や b で表現するのか、1 や 0 で表現するのか、という観点から全様態を分類するところの分類装置である。この表現方式が如何なるものかという文脈に於いては、スピノザは様態の貫属性的同一性を否定するのである。すなわち円は延長という分類装置で実体を局所的に表現し、円の観念は思惟という分類装置で実体を局所的に表現する。これらの表現装置は通約不可能であり、したがって、円と円の観念とは意義を全く異にする。それゆえにスピノザは「円と円の観念とは別のものである」（『知性改善論』第33節）と述べる。他方、円が局所的に表現する実体と円の観念が局所的に表現する実体とは同じものであり、したがって、円と

円の観念とは指示対象を同じくする。それゆえにスピノザは「円と、……円の観念とは同一物である」(テキスト⑩)と述べる。

以上から明らかのように、属性とは全様態をその指示対象に関してではなく飽くまでもその意義に関して分類するところの分類装置なのである。また、様態の貫属性的同一性が指示対象のレベルに於いて認められるからといって、このことは、様態の貫属性的同一性が意義のレベルに於いて認められないことと矛盾するわけでは全くない。したがって、様態の貫属性的同一性が指示対象のレベルに於いて認められるからといって、属性が様態の(単に分類の原理であるだけでなく)類別の原理であることが代数的に否定されるわけでは決してない。我々はスピノザ形而上学において、属性が様態の類別の原理であることをはっきり主張することが出来るのである。

## 結 び

議論を簡単に振り返り、また展望についても寸言しておくことにする。

本論での我々の目論見は2点あった。第1に、『エチカ』を読解するための新しい方法を提示することであり、第2に、その方法を具体的に実践するサンプルを提示することである。この実践サンプルにおいてスピノザ形而上学が整合的に理解される様子をどの程度まで示すことができるか、が、我々の新しい方法論の説得力の尺度となる。

我々の読解方法とは、第1に、『エチカ』の「公理体系」に線形性の論理を期待せず、スピノザの形而上学の構造が最も端的に現れているテキストを『エチカ』の内奥に見出し、それを糸口として他の箇所を逆算的に理解するという。第2に、『エチカ』の「公理体系」に構文論的な禁欲性を期待せず、主要諸概念の指示対象について、何らかのモデルを一次近似として積極的に設定し、スピノザの諸々の主張をそのモデルによって理解するという。

我々が出発点として選んだテキストは、第2部定理7(およびその証明・系・備考)であり、我々が設定した一次近似モデルは、S・ウルフラムが着想した1次元セル・オートマトンであった。

もちろん、本文中でも触れたように、セル・オートマトン・モデルに不十分なところはもちろんある。しかしこれは、従来の往々にしてきわめて抽象的なスピノザ解釈を超えるために極めて有効な、非常にクリアかつ多産的な1次近似モデルであるという感触を我々は抱いている。例えば、〈無限様態論〉や〈十全な因果性〉などといったスピノザ独自の見解も、セル・オートマトン・モデルによって明快に説明が可能であるという見通しを我々は持っているのである。しかしながら、そのような見通しを詳述することは、「方法論」としての本論の守備範囲を超えることである。



本論で示した方法を適用しつつスピノザ形而上学解釈の具体的な内実を更に敷衍するためには、新たに別個のモノグラフを用意しなければならないことになるであろう。

#### 引用・参考文献

- \* スピノザのテキストは、ゲープハルト版全集，すなわち，*Spinoza Opera*, 4 Bde, herausgegeben von Carl Gebhard (Heidelberg, 1925) に拠った。『エチカ』からの引用の場合は，巻数・ページ数によってではなく，定理や定義等を表示することで引用箇所を表示とした。それ以外の著作からの引用の場合は，ゲープハルト版全集を「G」と表し，後に，巻数とページ数を表示した。
- \* スピノザのテキストの日本訳に際しては，岩波文庫所収の畠中尚志氏によるものに原則的に依拠したが，箇所によっては筆者の責任において訳し変えた部分がある。
- \* ライプニッツのテキストは以下に拠り，これを「Ger」と略記する。*G. W. Leibniz: Die philosophische Schriften*, 7 vols., herausgegeben von C. I. Gerhardt, Berlin, 1875–1890.

Allison, Henry E. (1987): *Benedict de Spinoza* (revised edition) (Yale University Press).

Hart, Alan (1983): *Spinoza's Ethics, Part 1 and Part 2: a Platonic Commentary* (E. J. Brill).

Pascal, Blaise (1658): *Oeuvres completes* (Gallimard, 1954).

吉永良正 (1996): 『「複雑系」とは何か』(講談社)。